

# 資料編

## 参考資料（省エネルギー導入事例調査結果報告）

### 道外調査の調査概要 1

【調査日】 平成 16 年 9 月 29 日～10 月 1 日

【調査事例】

- ① 東京都 ・ホテル日航東京の省エネルギー化
- ② 鹿児島県加世田市 ・市営・県営住宅の省エネルギー化
- ③ 鹿児島県喜入町 ・県営住宅の省エネルギー化

【参加者名】

事務局 福村、鎌田（建設課長）

### 道外調査の調査概要 2

【調査日】 平成 16 年 10 月 25 日～27 日

【調査事例】

- ① 岩手県盛岡市 ・ヒートポンプ式熱源システム導入住宅展示場
- ② 岩手県葛巻町 ・クリーンエネルギーの取り組み

【参加者名】

策定委員 山下委員、松田委員、茅野委員  
事務局 片山、青木、黒瀧（建築管理係長）

### 道内調査の調査概要 1

【調査日】 平成 17 年 1 月 23 日～25 日

【調査事例】

- ① 旭川市 ・北海道立北方建築総合研究所（省エネルギー研究所）

【参加者名】

事務局 福村、黒瀧（建築管理係長）、山崎（建設管理係）

## 道外調査の調査概要 1

### ① ホテル日航東京

【対応者】株式会社 省電舎 技術開発部ゼネラルマネージャー 神代尚基氏

#### 【省電舎の事業】

省電舎は1974年に設立された比較的新しい会社ではあるが、創業以来エネルギー削減保証型の省エネ事業を推進している。「省エネルギーアドバイザー」という視点から地球環境保全を重視したエネルギーコスト削減と省エネルギーの推進を主な事業としている。

現場主義の重要性を認識し、施設にあった調査・診断を行い、施設にふさわしいプラン作成・提案を行い、実践的な省エネ事業を展開している。主に、公官庁、ホテル、レジャー施設、百貨店、オフィスビルなどの省エネ施工を行っている。

#### 【施設の概要】

ホテル日航東京

今回、省電舎が省エネルギー化を手がけたホテル日航東京の現状を見た。このホテルでは主に、①照明設備の合理化、②動力インバータ化、蒸気配管保温プランの三つの省エネルギー化を推進している。

照明設備の合理化では蛍光灯の効率化を目指して、インバータ安定器（電力の周波数を変更する装置）の交換を行うことで省エネ化を図ろうとするものである。蛍光灯内では、電力の周波数に応じて、電流を行き来させているが、周波数を大きくすることで、電流が行き来する回数が増え、少ない電流でも明るく点灯できるようになるとのことである。

インバータ安定器の交換により、電力消費の大幅削減が可能となり、40%程度の照明設備の省エネ化が推進できるというものである。

また、インバータ安定器の交換の他に、白熱ランプの省エネ化も同時に推進させている。省エネタイプのものに交換するだけで、同じ明るさを維持でき、実に79%の大型省エネが可能となるというものである。また、同様に水銀灯も高効率、長寿命型のもを採用することにより、40%もの省エネ化を図ることができたそうである。

動力インバータの導入は、現在の設備（ファンやポンプなど）を最適に制御させるものである。現在の設備は必要能力以上に稼動しており、それを制御するインバータを導入することで、適正な管理ができ、効率化が図られている。また、当初計画とは変更になったゴミドラム室、厨芥置場の給排気ファンも実情に合わせることで、エネルギーの削減を行っている。

蒸気配管保温については、地下のボイラーの配管に一部、保温がなされていない箇所があり、その箇所に取り外し可能なカバーを設けることで大幅に放射熱を減少させ蒸気使用量を削減することができるものである。

このような省エネルギー化を進めた結果、年間1,200万円のコストダウンが図られている。設備投資額の3,330万円は、3年間で回収できる見込みとなっている。なお、このホテルは、建設後5年間で省エネルギー化を進めたことにも注目すべきである。つまり、施設が老朽化して、交換時期を待つのではなく、多少のコストがかかったとしても、

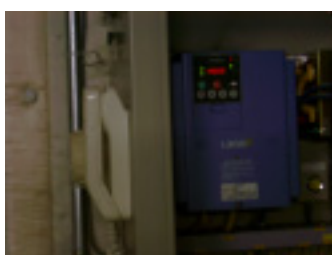
できるだけ早く省エネルギー化を実施するほうが、はるかに効率的であることを示している。

#### 【ニセコ町に導入すべき点】

ニセコ町にも大きな施設が多数あるが、照明設備の省エネ化を推進することで、かなりのエネルギー消費を抑えることができると考えられる。また、実情に合わせることで、設備コストはかかるが、ランニングコストで軽減できると考えられ、積極的な導入を検討すべきであると思われる。



インバータを入れた蛍光灯にはシールが貼られる



動力インバータ本体。これですべて制御される



カバーを設けられたボイラーの配管

#### ② 加世田市営住宅、県営住宅ハーモニー団地

【対応者】 加世田市役所 建設部都市計画課建築係長 田代昌吾氏  
鹿児島県加世田土木事務所 建築課長 志賀正史氏

#### 【加世田市の概要・加世田土木事務所】

加世田市は薩摩半島の南西部に位置し、北西側は東シナ海に面して周囲は、山々で囲まれており、総面積の53.9%は森林である。東シナ海に面した北西部は、日本三大砂丘の一つである吹上浜(約4.7km)の南端にあたり、約5kmの砂丘地帯が広がっている。

なお、鹿児島県加世田土木事務所は加世田市、枕崎市、川辺郡を管轄している。

#### 【市営・県営住宅の省エネルギー化の概要】

このハーモニー団地は、鹿児島県の土地供給公社により取得、造成させたもので、分譲地と公営住宅(市営・県営)とで成り立っている。これらを一つの行政区(字ハーモニー)として設置し、大きな集会所も建設した。計画では、県と市でそれぞれ75戸(計150戸)を整備する計画である。平成16年度までに県営住宅は68戸、市営住宅は35戸を整備することとしている。この団地の建設にあたっては、鹿児島大学松永研究室の協力を得て、プロジェクトを設置して、県と市が共同で開発したものである。当初から、デザインや仕様、省エネルギー化の方策など検討し、進められてきた。補助は国土交通省の補助をメインに、起債と一般財源で建設を進めている。公営住宅の省エネルギー化は、以下のとおり。

- ① 空調負荷を減らすため、屋上緑化(セダムの利用)を実施した。
- ② 南面に大きな開口部と庇を設け、冬の日射取得と夏の遮熱を行った。

- ③ 南側の窓に複層ガラス、西側の窓に Low-e ガラスを使用した。
- ④ 照り返し防止のため、駐車場・ボンエルフ道路に緑化ブロックを採用した。
- ⑤ 集会施設の照明や外灯に太陽光発電装置を設置した。
- ⑥ 夏風を起こし、蒸発冷却で暑さを逃がすため、各住宅にせせらぎ（小川）を設けた。
- ⑦ 全体として南北に短く、各部屋に風通しの良い設計とした。
- ⑧ せせらぎ水には雨水を利用した。
- ⑨ 将来的なりフォームを考え、平面計画及び工法とした。

【ニセコ町に導入すべき点】

公営住宅を省エネルギー化するというのは、単に省エネルギー機器を導入するばかりではなく、地域の実情に合わせて、どのようなコンセプトで設計していくかということである。また、省エネ化はコスト高と一般的に言われているようだが、設備コストとしても今までの価格とさほど変わらないということもわかってきた。特に、集会施設等を省エネ化することは住民への環境、エネルギー教育にとって効果があるのではないかと考えられる。



屋上緑化された団地の全  
景



太陽光発電施設が設置さ  
れた集会施設



外灯用の太陽光発電器

③ 喜入町県営住宅

【対応者】 鹿児島県指宿土木事務所 建築課長 福永貴幸氏

【喜入町の概要・指宿土木事務所の概要】

喜入町は、鹿児島県の薩摩半島、錦江湾（鹿児島湾）に面した南北16km、東西6.2kmの細長い町である。北部は鹿児島市と面し、南部は指宿市と面している。また、世界最大の石油備蓄基地があり、遠く中東をはじめ世界各国から原油が運ばれてくる町でもある。

なお、指宿土木事務所は指宿市、指宿郡を管轄しているが、喜入町は11月1日に鹿児島市と合併するため、管轄が変わる。

【公営住宅の省エネルギー化の概要】

このラメール中名団地は、石油備蓄基地の北隣に位置する埋立地に建設されたものである。台風などの気象条件を考慮し、低層化した住棟としているのが特徴である。また、高齢者にも配慮した形となっている。太陽エネルギーと夏の通風を考慮し、住戸は南面に接している。冬の北風を防ぐために住戸来面に土盛りしているのも特徴である。この団地でも屋上緑化、複層ガラス、太陽熱温水器などが設置されて、環境負荷の少ない住宅とな

っている。平成16年度までに県営住宅は25戸（計画完了）、町10戸を整備することとしている。全体では50戸の整備計画ではあるが、市町村合併もあり、今後の町営住宅の建設は未定である。この団地の建設計画も県と町がプロジェクトチームを設置して、県と町が共同で開発したものである。当初から、デザインや仕様、省エネルギー化の方策など検討し、進められてきた。鹿児島県では、このようなプロジェクトを設置して公営住宅の建設を進めるという方法が多いようである。公営住宅の省エネルギー化は、以下のとおり。

- ① 空調負荷を減らすため、屋上緑化を実施した。
- ② 南面に大きな開口部と庇を設け、冬の日射取得と夏の遮熱を行った。
- ③ 南側の窓に複層ガラスを採用し、冷暖房の負荷の低減を図る。
- ④ 照り返し防止のため、駐車場・ボンネルフ道路に緑化ブロックを採用した。
- ⑤ 住棟北側に土盛り、地中冷熱を利用し、夏・冬の冷暖房の環境負荷の低減を図る。
- ⑥ 各住戸一階屋上に太陽温水器を設置し、エネルギー消費の削減を図る。
- ⑦ 全体として南北に短く、各部屋に風通しの良い設計とした。
- ⑧ 専用庭の囲みにアサガオやブーゲンビリアなどのツタ性植物を植えることで、夏の直射日光を抑える。
- ⑨ 広場の北側入口を狭めることにより、冬季の季節風の進入を防止する。

#### 【ニセコ町に導入すべき点】

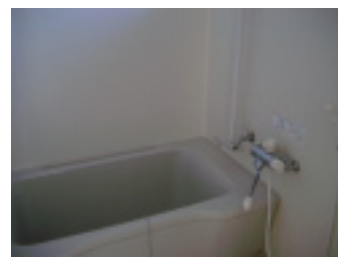
ここでも、公営住宅の省エネルギー化のために自然をうまく生かす試みが施されている。ニセコ町においても、高齢者に配慮した低層住宅の建設を進めており、この公営住宅はとても参考となる。この公営住宅では地中熱をうまく活用する方法として、北側に土盛りする方法が採用されている。この方法により、どれくらいの省エネ化が実現されているかは数字化されていないが、入居者からは評価が高いようである。つまり、公営住宅の省エネ化はもちろんのこと、省エネ教育という観点からも、公営住宅の省エネ化の効果は大きい。ニセコ町においても、自然をうまく活用した省エネルギー公営住宅の建設、改修が必要であると同時に、入居者へ向けた実践版の省エネ教育が今後重要となる。今後、省電舎の開発技術などの導入や、総合的な省エネ公営住宅の建設へ向けた取り組みが必要と考える。



ラメール中名団地の低層住宅



北側の盛土



奥の蛇口が、太陽熱による温水口

## 道外調査の調査概要 2

### ① 5きげんハウジング

【対応者】 東北電力株式会社 盛岡営業所 松長博幸氏  
株式会社電力ライフ・クリエイト盛岡営業所 田名部忠男氏・南雲芳郎氏

#### 【施設の概要】

環境共生をコンセプトに地中熱・空気熱などの自然エネルギーを利用したヒートポンプ式の熱源システムを採用した全国初の総合住宅展示場である。

この展示場は、岩手テレビが主催し、大手の住宅メーカー8社の高気密・高断熱住宅に各種のヒートポンプを熱源として組み合わせ、二酸化炭素の削減と資源の高度有効利用を図る「環境共生型の住まいづくり」を提案している。また、ヒートポンプ電気暖房システムの導入には東北電力盛岡営業所、電力ライフクリエイトが特別協賛している。

採用システムは、外気を熱源とする通常タイプのほか地中熱や室内の換気排気を熱源にするタイプなど8種類があり、棟ごとにシステムの組み合わせを変えるなどしてさまざまなヒートポンプの採用例を紹介している。

ヒートポンプユニットを戸外に「熱源棟」として独立させており、熱源棟だけの見学も可能である。各棟の熱源設備のイニシャルコストは150万～260万で、ランニングコストの予想値は年間75千円～132千円である。また、熱源システムが40坪～50坪を目安にしているのに対し、各棟は70坪～100坪の建坪を有しているため、ランニングコストは予想値を上回るとのことであった。

#### 【ニセコ町に導入すべき点】

高断熱・高気密住宅では、冷暖房用の消費電力が少なくなる分、日々のランニングコストも大幅に低減することになる。ヒートポンプ技術を利用することで、ランニングコストはさらに抑えられ、環境保護と省エネルギー、経済性を同時に実現することが可能である。また、冷暖房負荷の少ない夜間に熱を蓄え昼間にその熱を利用すれば、未利用エネルギーの活用にも有利である。夜間電力利用による電力負荷の平準化にも寄与することから、積極的な導入が望まれる。熱源設備の費用は数年前に比べ、かなり安くはなっているものの、初期投資におけるボーリング費用や設備の更新など、まだまだ課題が多い。企業のさらなる技術革新、低コスト化とともに一般ユーザーに対する普及活動、そしてなによりも一般ユーザーの関心が必要である。

### ② 葛巻町

【対応者】 葛巻町エネルギー政策課 下天摩浩氏  
葛巻小学校教諭 菊地史知氏

#### 【葛巻町の概要・クリーンエネルギーの取り組み】

人口 8,647 人、面積 434.99 平方 km。岩手県北に位置し、北緯 40 度の北上山地にある葛巻町は、標高が高く、町面積の 95%が標高 400 メートル以上であり、全町の 86%が緑豊かな

な森林で占められ、山岳と溪谷、なだらかな高原が織りなす複雑で変化に富む地形を示している。気候は、高標高地に位置しているため、内陸型で寒暖の差が大きい。基幹産業は、東北一の酪農郷と呼ぶように乳牛が11,000頭、乳量にして日120トンにおよぶ。また、山葡萄を主原料にしたワイン、林業の町である。

第3セクターのくずまき高原牧場やくずまきワイン、我々も宿泊したグリーンテージ(ホテル)などで、過疎対策や雇用対策を行っている。

葛巻町の環境政策は、平成7年の自然環境保護条例に始まり、自然とともに豊かに生きる町を宣言した。平成11年には新エネルギービジョンを策定し、クリーンエネルギーを積極的に導入し、地球環境問題の解決に取り組むさまざまな事業を実施している。

平成10年に設立されたコワールドくずまき風力発電所は、発電出力1,200kw、総発電量は一般家庭の900世帯分に相当する。原油換算で300k1、二酸化炭素削減効果は、年間296トンの削減に寄与している。

売電による収入は、運営会社の収入となるが、これら施設の固定資産税、法人町民税らの収入は、新エネ・省エネ事業に使用している。

また、平成12年に稼動した葛巻中学校太陽光発電設備は、発電容量50kWで天気がよければ、同校の昼間に消費する電力を全てまかなうことが可能で、余剰電力は売電している。

また、木質バイオマスエネルギーとして、ペレット燃料を活用している。町内にある葛巻林業㈱がチップを製造し、森の館ウッディのペレットボイラーで暖房をまかなっている。この設備はボイラー管理の資格が必要なく、故障もないということである。老人保健施設の暖房給湯にも導入されているほか、ペレットストーブの普及にも力を入れている。町民に対する新エネルギーの補助制度も充実しており、これまで、太陽光発電7軒、太陽熱温水器60軒、ペレットストーブ4台、企業に対してはいわて型ペレットストーブ14台を数える。

酪農からでるふん尿については、バイオガスとしてエネルギー化し、処理されたふん尿については液肥として農地へ還元される。また、地元材であるいわて杉を利用したメタン発酵層の検証も行っている。省エネはもとより産業振興など、地域振興につなげている。マイクロ水力発電は自治会単位で行われているが、残念ながら冬支度のため、設備は撤去されていた。

平成15年度には省エネルギービジョンを策定し、平成14年のエネルギー消費量を2010年までに6.6%削減(1年1%削減)を目標としている。また、エネルギー自給率を現在の78%から100%にする取り組みが掲げられている。実行計画は、畜ふんバイオ、木質バイオをそれぞれ10%増、省エネによるエネルギー消費量を6%減にし、100%とするものである。

省エネプロジェクトとして、特筆すべきは葛巻町の環境は未来の子どもたちへの贈りものとして、未来の葛巻の主演である子どもたちをリーダーと位置づけていることである。すでにそのリーダーとなった子どもたちが省エネ活動や環境保全活動を積極的に行なっている。

葛巻小学校では、省エネルギー推進モデル校の指定を受けエネルギーや環境問題について学習している。平成13年度には、地域にある新エネルギー施設について調べることでエネルギーの大切さや環境問題を学習し、省エネの意識を高め、平成14年度に総合学習の年間指導計画に位置づけ省エネルギー教育として実施した。内容は、省エネナビを活用し、



電気を中心に家庭や学校で具体的にエネルギー節約を考え、保護者と児童が一緒になって環境問題を学習した。平成15年度は、学校、家庭での省エネの実践、地域との連携活動を中心に日常的な省エネ活動の実践を進めたほか、学校から地域へ省エネ活動を発信している。その取り組みは、6年生の生徒一人ひとりが各家庭での節電に取り組み、節電実績を持ち寄ってどれだけ省エネができたか確かめるというもの。

これらの取り組みが地球温暖化の歯止めに役立つ手ごたえをつかみとり、全校省エネ集会の開催や年齢差のある1年生から5年生までの下級生に対して学級訪問を行い、紙芝居やポスター、新聞などさまざまなPR活動を実践して省エネ活動を全校に広げた。

#### 【ニセコ町に導入すべき点】

葛巻町では、「何もないまちだからこそ、何かをつくるしかない」という発想からエネルギー政策を進めている。しかしこれらの取り組みは、町民に対してやってみたいと思う仕組みやきっかけづくりとして有効に機能している。また、各種の取り組みは単に二酸化炭素削減にとどめることなく、林業や畜産業など地域の地場産業をエネルギーに変え、過疎対策や雇用対策など地域の活性化につなげている点は、ビジョンを策定する1つのポイントになるのではないかと考えられる。また、省エネルギービジョンについても、町の将来の担い手である子どもたちを主役として位置づけ、学校ぐるみや家庭を巻き込んだ取り組みを進めることも重要である。とりわけ、省エネナビのように小さな取り組みであっても、エネルギー消費量が数値で表され、二酸化炭素の排出削減や地球温暖化防止にどう貢献しているか、実感することができる。このようにわかりやすく、楽しみながら、一つひとつの進めることが環境政策を進めるにあたっての大きな一歩になるのではないかと考えられる。

## 道内調査の調査概要 1

### ① 北海道立北方建築総合研究所

【対応者】北海道立北方建築総合研究所 研究職員 佐藤博司氏

#### 【北海道立北方建築総合研究所の事業】

北海道立北方建築総合研究所は「第10回環境・省エネルギー建築賞国土交通大臣賞」を受賞した研究所庁舎を持ち、北海道内の中でも最先端を行く省エネルギー研究所である。この研究所は、当初、札幌市琴似地区から平成14年4月に旭川市緑が丘へ庁舎移転建築したもので、エネルギー関係や北方住宅研究のための大型実験設備を有している。

施設概要としては、敷地面積34,016㎡、延床面積8,356㎡、地上4F、地下1階、鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造からなり、管理棟、実験棟に分かれる。

組織内容は、①企画総務部②居住科学部③環境科学部④生産技術部の4部門で構成され、研究の基本目標を、①安全と安心②環境との調和③人へのやさしさ④地域と生活⑤産業と技術とした5つ、定めている。これらを基本とし、各分野で調査研究を行っている。

#### 【施設の概要】

1Fは、研究各部として7つの実験室で配置され、特にアトリウム棟は、ガラス張で天井まで吹抜けになっており、普段は、住宅の情報ラウンジとしてさまざまな情報提供の場となっている（この日は、本州の大学から生徒が来ておりアトリウム内で、風圧力の研究調査をしていた）。2Fは、主に図書室や会議室などがあり、3Fは、研究職員の執務室となっている。実験棟の方は、建築物理実験室や室内環境シミュレータ室がある。4Fは、倉庫室とされている。B1Fは、機械室とアイスシェルター、貯雪槽などがある。

この建物の特徴は、単なる研究所ではなく、施設自体がパイロットモデル（建物自体が研究の一部という意味）として活用されているということである。

その特徴として、

#### ①パッシブ換気

・アトリウム空間のドラフト効果を利用しており、自然動力による換気を行っている。

（アトリウム棟上部に排気口を設けており、地下室や1Fから上部へと空気を循環させて換気する仕組みになっている。）

#### ②自然光の利用

・窓とアトリウムの両方から採光を取り入れている。特に外部には、ライトシェルフを付け地盤面からの反射による光を室内へ取り入れる。一方内部の拡散ガラスは、外からの光を調節するのに利用されている。

③夏期の防暑対策として、日射遮蔽の工夫、自然通風による工夫、氷冷房システムなどが利用されている（アイスシェルターは、冬期に外気を利用してつくった氷を夏まで保存し、外気を通して冷房に利用したもので100tの氷を貯蔵できるとのこと）。

このように、施設自体が高断熱・高气密の建物仕様を行い、パッシブ換気システムや自然光活用、氷冷房などを積極的に活用し、環境負荷の低減を図った省エネ型の施設といえる。

別棟にはヒートポンプの実験中の施設や耐火実験室棟がある。ヒートポンプの実験棟内部は、配管や配線が室内に多く設置されており、正直なところ住宅の省エネ暖房対策として将来期待できる設備になるか、旭川市ではコスト的にも実用が難しいものだと感じた。また、耐火実験室棟では、材料の耐火実験を行い、最終的に国土交通省からの認定をもらうための実験を行っている。また、マウス実験から材料が燃焼することで、人体に悪影響が無いかなど実験を行っている。

#### 省エネルギーに関する説明

【対応者】北海道立北方建築総合研究所 環境科学部 居住環境科 科長 鈴木大隆氏

#### 【施設建設計画におけるコンセプト】

この施設のコンセプトはコスト削減に努めるため、できるだけコンクリートを使用せず、ブロックを意匠に使っている（断熱性、北海道産材用の宣伝）。また、機械換気システムだけではなく、施設内に緑化も推進している。しかし、アトリウム棟内では、植物が乾燥してしまうなど、問題も抱えており、北海道での室内緑化の難しさを感じた。

施設の建設時に考慮したことは、①地域生産（北海道産の使用）、②ローメンテナンス（維持管理費をかけない）、③省エネ（自然光、冷風熱の利用など）などである。

その他に、自然エネルギーの利用のあり方や高断熱・高気密による暖房負荷の軽減や自然光照明負荷の軽減など説明を受けた。雪を利用した冷房システムの説明など、実際にこの施設でも利用している。

#### 【ニセコ町が考慮し、導入すべき点】

北海道における省エネルギー化や新エネルギーの導入についていろいろと考えさせられる点が多い。特に、地場産品の使用でローメンテナンス化が図れる点、本州で作られる素材を使うから、北海道に適した省エネルギー化が実現できないなど、考えさせられた。ニセコ町においても、地場産品を使い、ローメンテナンス、ニセコ町に適した省エネ構造の施設等を建設する必要がある。このようなことが、地場産業の育成、地域産業の再生、そして、地域に根ざした省エネルギー化が図れると感じた。北海道は雪が多いが決してそのことがハンデとはならない。雪面反射や雪氷熱利用など、北海道ならではの省エネルギー対策、新エネルギー導入がある。デザインにこだわらない、自然を活用した自然光を利用した照明の節電、さらにヒートポンプ設備や冷風熱などを利用した設備があり、さまざまな省エネルギー化が図れることを学ぶことができた。今後も、ニセコ町に合った省エネ化を推進することが重要である。

#### 【調査の成果】

今回の調査では、省エネルギーに関するいろいろな実験を通して、快適な住環境を研究している機関だけあって、どれも素晴らしいものであると感じた。特に施設すべてが、実験室とittedだけあって、多くの研究者や見学者が訪れている。

研修では、自然エネルギーを利用した施設を見学し、高断熱・高気密、自然光を利用した照明の節電、さらにヒートポンプ設備や冷風熱など、さまざまな省エネルギーを利用し

た設備を学ぶことができた。特に驚いたのは、北方建築総合研究所内に巨大なアトリウム棟があり、管理棟と実験室棟を分けている。コスト削減から主構造は、鉄骨材の柱と梁を使用し、耐力壁はコンクリートブロックを利用している。

また、震度6強以上の地震が発生した場合、アトリウム棟のガラスが割れる恐れとコンクリートブロックが崩れることなどが心配であると言っていたのが気になった。

その他、施設以外に何棟もの実験室が敷地内に建ちならび、日々いろいろな実験が行われている。

省エネルギーの考え方はもとより、こうした建築技術の研究が将来の我々にとって大切なものであると強く感じた。

## 策定委員会関係資料

### 1. 策定委員会名簿

	氏名	所属
委員長 (1名)	近久 武美	北海道大学大学院教授
副委員長 (1名)	牧野 純二	NPO 法人 しりべつリバーネット理事長
委員 (9名)	山下 暁子	ニセコ町環境審議会長
	松田 保	ニセコ町環境審議会副会長
	村上 公彦	ニセコ町リゾート観光協会会長
	大江喜 章	(財)省エネルギーセンター北海道支部事務局長
	大槻 正利	JA ようていニセコ支所長
	茅野 紀行	北海道電力(株) 倶知安営業所長
	住吉 美枝子	グリーンアースニセコ
	川原 与文	林業経営者

### 2. 策定委員会の実施状況

第一回策定委員会	
日時	2004年8月12日(木)10:00~12:00
場所	ニセコ町民センター・一般研修室
参加者 (敬称略)	【策定委員】近久武美、牧野純二、村上公彦、茅野紀行、住吉美枝子、川原与文 【オブザーバー】保坂史郎、山本有三、阿部洋一、斉木伸夫 【事務局】片山健也、福村一広、青木大介
議事内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニセコ町地域省エネルギービジョン策定事業作業日程について</li> <li>・町民アンケート(案)について</li> <li>・エネルギー需給構造に関する調査について</li> <li>・聞き取り調査内容と施設対象について</li> <li>・地域のエネルギー消費の実態調査の内容について</li> <li>・先進事例の調査先の選定について</li> </ul>

第二回策定委員会	
日時	2004年10月18日(月)14:30~16:30
場所	ニセコ町役場第二会議室
参加者 (敬称略)	【策定委員】近久武美、牧野純二、山下暁子、松田保、村上公彦、大槻正利、茅野紀行、大江喜章 【オブザーバー】布目光宏、山本有三、斉木伸夫 【事務局】片山健也、青木大介
議事内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニセコ町地域のエネルギー消費状況調査結果について</li> <li>・町民の省エネ意識調査結果について</li> <li>・ペンション事業者の省エネ意識調査結果について</li> <li>・特定事業者のエネルギー消費状況調査(中間報告)について</li> <li>・重点テーマの候補について</li> <li>・ビジョン策定報告書全体の構成案について</li> </ul>

第三回策定委員会	
日時	2004年12月27日(月)15:30~17:30
場所	ニセコ町民センター・一般研修室
参加者 (敬称略)	【策定委員】近久武美、山下暁子、松田保、村上公彦、大槻正利、川原与文、茅野紀行 【オブザーバー】保坂史郎、和泉田裕子、斉木伸夫 【事務局】片山健也、福村一広、青木大介
議事内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニセコ町地域エネルギー消費状況調査結果について</li> <li>・家庭部門省エネ可能性分析について</li> <li>・業務部門の省エネ可能性分析について</li> <li>・業務部門の省エネ可能性分析について(特定施設等)</li> <li>・その他部門の省エネ可能性分析について</li> <li>・地域省エネ目標設定について</li> <li>・地域省エネ重点テーマとその評価について</li> </ul>

第四回策定委員会	
日時	2005年1月24日(月)13:00~16:00
場所	ニセコ町公民館・講堂
参加者 (敬称略)	【策定委員】近久武美、牧野純二、山下暁子、松田保、村上公彦、大槻正利、川原与文、大江喜章、茅野紀行 【オブザーバー】布目光宏、清水敏子、斉木伸夫 【事務局】片山健也、福村一広
議事内容	・最終報告書の検討